

# 元照系「觀經十六觀變相図」解釈に関する一試論

—第一觀から第七觀を中心に—

三 島 貴 雄

の解釈が反映された別系統のものである。

元照は南山律宗を復興し、中国律宗の第十五祖とされる僧である。宋代の代表的な淨土教家の一人でもあり、日本淨土教、特に法然門下へ与えた影響は少なくない。その生涯を杭州で過ごし、晩年は西湖東岸の靈芝崇福寺に住したことから「靈芝元照」、また「大智」の諡号を贈られたことから「大智律師」とも称される。臨終には『觀往生のための十六の觀想は、しばしば図像化され、觀經変や十六觀図などの多くの作例が東アジア各地に残されている。

日本においては、当麻曼荼羅、智光曼荼羅、清海曼荼羅のいわゆる淨土三曼荼羅や来迎図などが淨土三部經に基づく淨土教美術として有名である。特に法然門下の証空（一一七七～一二四七）によつて流布した当麻曼荼羅は、唐の善導（六一三～六八一）『觀無量寿佛經疏』（以下、『四帖疏』という）の解釈が反映されたものとして知られ、多くの転写本が残っている。これに対して、本稿で取り上げる「觀無量寿佛經十六觀相」図（以下、「觀經十六觀變相図」という）は、濱田隆氏<sup>(2)</sup>によって指摘されたように、宋の元照（一〇四八～一一一六）『觀無量壽佛經義疏』（以下、「觀經新疏」という）

## 一、はじめに

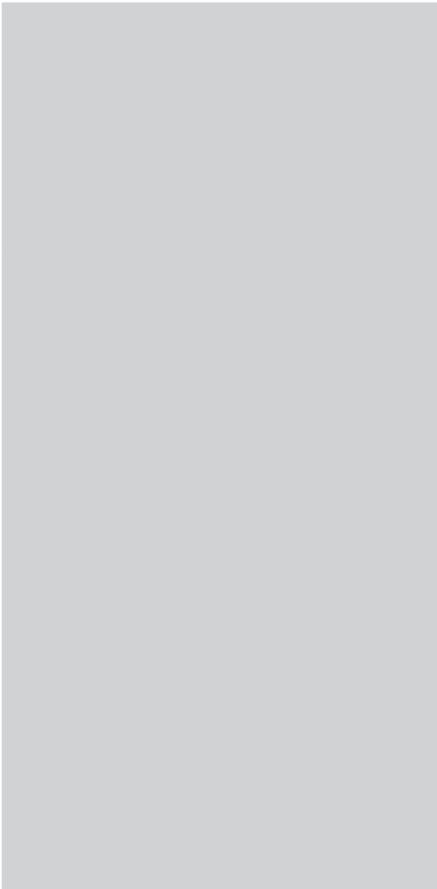
研究があり<sup>(3)</sup>、濱田説を受けつつ、宋代仏画が日本において写された作例の一つとして取り上げられている。また、逆手來迎印を結ぶ第十三雜觀の阿弥陀三尊像と淨土寺の阿弥陀三尊像との関係なども注目されている。一方、元照の淨土教思想については、仏教學より近年まとまった論考が発表されている。<sup>(4)</sup>従来、元照の思想は、法然門下に多く引用されていたことから、善導淨土教との関係で語られることが多かつた。しかし、現在は宋代仏教の諸宗融合という傾向を踏まえつつ、律宗系淨土教家としての元照という観点から、その見

直しが進められている。これまでの「観經十六觀變相圖」の解釈も、当麻曼荼羅の研究が先行していたことから、「四帖疏」の言葉を借りて解説している例も多い。しかし、元照の思想が反映された作例として考えていくにあたっては、用語の扱いなどは注意しておく必要があるう。

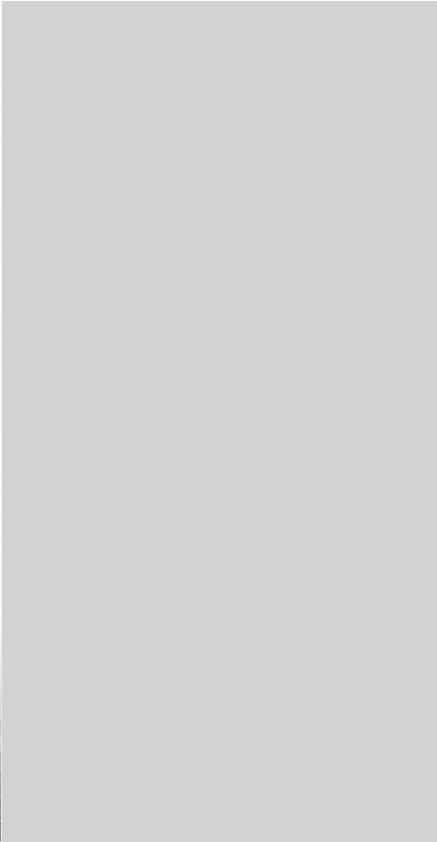
元照は『観經新疏』のなかで自身の解釈について以下のように述べている。

又前代解釈凡有數家。隋朝慧遠法師天台智者大師皆有章疏。唐善導和尚亦立玄義。並行於世、而各尚宗風互形廢立。故今所釈辯善從之。必有差訛不無糺正。<sup>(5)</sup>

すなわち、淨影寺慧遠（五二三～五九二）の『觀無量壽經義疏』（以下、『慧遠疏』という）、伝天台智顗（五三八～五九七）の『仏說觀無量壽佛經疏』（以下、『天台觀經疏』という）、『四帖疏』玄義分の



挿図1 阿弥陀寺本



挿図2 長香寺本

解釈を取捨選択し、自身の解釈を確立している。また、同時代の慈雲遵式（九六四～一〇三二）ら各宗の淨土教思想を有した人々の影響も指摘されている。<sup>(6)</sup>

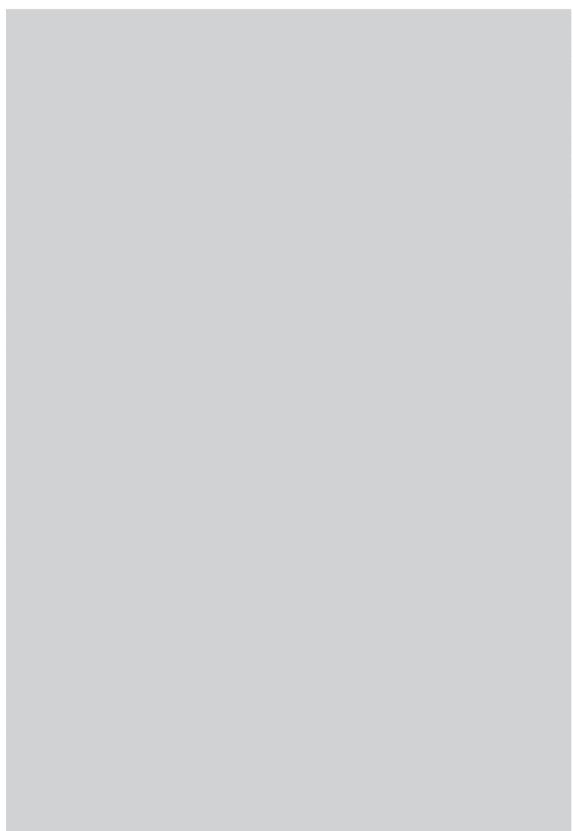
本稿は「観經十六觀變相圖」と『観經新疏』を改めて照らし合わせながら、類例も参考にしつつ、その解釈と図像上の問題点について考えていく試みである。

## 二、「観經十六觀變相圖」諸本と『観經新疏』について

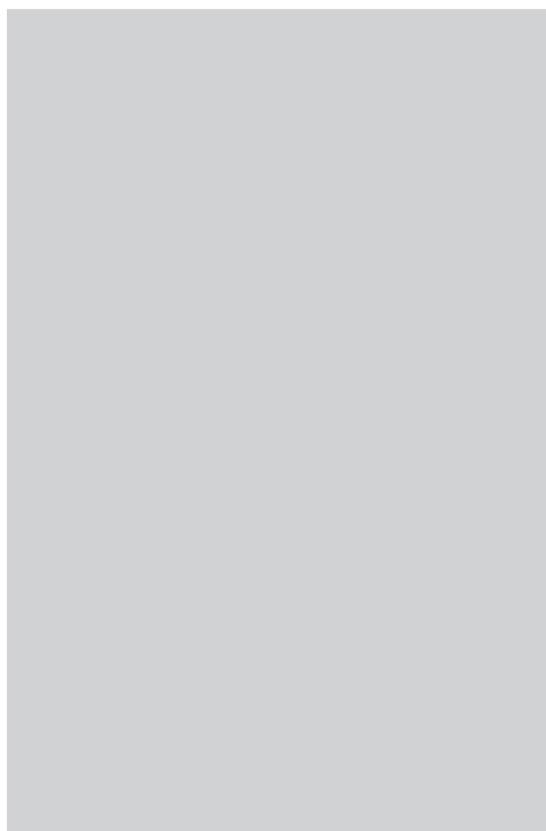
本稿で主に取り上げる「観經十六觀變相圖」は、阿弥陀寺に伝わる一本（挿図1、以下、阿弥陀寺本という）と長香寺に伝わる一本（挿図2、以下、長香寺本という）の二本が知られており、図様及び構成はほぼ同じである。両本とも国の重要文化財であり、宋画を元に鎌倉時代に日本において書写されたものと考えられている。現状については山川曉氏の論文に詳しい。阿弥陀寺本は縦一二八・五cm、横六一・五

cm、長香寺本は縦二〇九・〇cm、横一〇四・五cmで、阿弥陀寺本の方が小振りである。また、阿弥陀寺本には俊乗房重源（一一二一～一二〇六）将来との伝承も残っている。各図には題記を伴い、その構成は一見すると画面を右、中央、左の三分割にして、見るように見えるが、先行研究<sup>(8)</sup>で明らかにされているとおり、四つに分けて考へるべきであろう。すなわち、一つめは画面中央最上部、中央に十六觀中の第一觀を描き、向かって右に「王宮□韋提希□□」、左に「耆闍崛山大衆雲集」の題記を伴う図を配置する。二つめは向かって右に区画を設け、上から第二觀から第七觀の図を配置する。三つめは向かって左に区画を設け、上から第八觀から第十三觀の図を配置する。四つめは中央で区画は設けず、樓閣によつて図を三つに分け、下から第十四觀から第十六觀を配置する。

両本と同じ系統に属する高麗仏画に西福寺の「觀經曼荼羅図（正宗分）」（挿図3、以下、西福寺本という）がある。縦二〇三・五cm、横一・九・〇cmで、「觀經十六觀變相図」と類似の構図を持つ。しかし、第二觀から第十三觀までが円形の区画に描かれること、十四觀から十六觀が上から下に配列されること、題記に七言絶句の偈頌を伴うこと、図に加除があることなど、異なる点も多くみられる。ただ、第二觀から第十三觀までの題記はほぼ同じで、図様もよく似ている。大高寺蔵の「觀經十六觀變相図」（挿図4、以下、大高寺本という）も連する作例として知られている。上部に配置された円形の区画に、前十三觀が第一觀を中心と左右に振り分けられ、よく似た図様が描かれていたことがみてとれる。前十三觀の配置が先の三本と異なり、均一に扱われている点は興味深い。ただし、画面上部に傷みもあり、図様を細かく比較することが難しいものもある。画面の大部分は後



挿図4 大高寺本



挿図3 西福寺本

三觀の描写が占めており、描かれる往生者が全て菩薩衆であることから、四明知礼（九六〇～一〇二八）の解釈を反映したものとの見解もある。<sup>(19)</sup>

観経変の形式ではないが、同じ系統に属するものとして、逸見梅栄氏が「大智律師禪觀図」として紹介した版本もある。<sup>(11)</sup> 折本装で、釈迦と韋提希が対面する図から始まり、第一觀から第十三觀までが一図ずつ描かれ、第十四觀から第十六觀については一図にまとめられている。各図の下には「大智律師元照頌」という偈頌があり、「樂邦文類」卷五所収の元照の「十六觀頌」<sup>(12)</sup>と一致する。これは明清時代に流布した版本の一つと考えられている。<sup>(13)</sup>

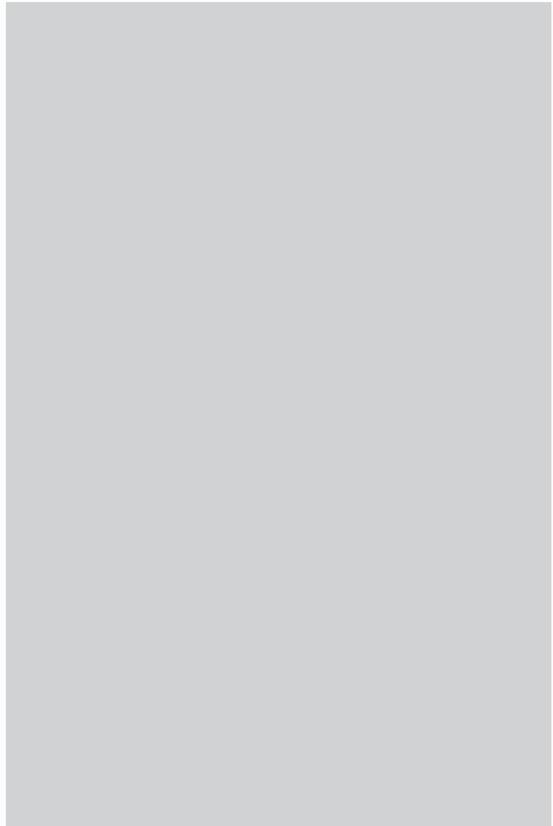
この他に元照系統に属すると考えられる観経変は、隣松寺藏本、知恩院藏の二本、法輪寺藏本が知られている。これらは前十三觀の区画を設げず、淨土図の中に各觀を配置している。

これらの諸本の大きさについては、別表にまとめたとおりである。縦二〇〇cm前後の大型のものが多く、「観経十六觀變相図」の原本も同様の大きさであつたことが想像される。

別表

	材質彩色	時代	縦(cm)	横(cm)
阿弥陀寺本	絹本着色	鎌倉時代・一二世紀	一一九・〇	一〇四・五
長香寺本	絹本着色	鎌倉時代・一三世紀	一一八・五	六一・五
西福寺本	絹本着色	高麗時代・一四世紀か	一一九・八	一一一・八
大高寺本	絹本着色	高麗時代・一四世紀か	一一三・〇	一一一・〇
隣松寺本	絹本着色	高麗時代・一三二三年か	一一四・〇	一一二・五
知恩院A本	絹本着色	高麗時代・一三二三年か	一一四・二	一一二・五
知恩院B本	絹本着色	李朝時代・一四六五年	一一九・〇	一一二・五
法輪寺本	絹本着色	李朝時代・十五世紀	一一九・二	一一二・九

また、これまで言及されていないが、元照系統の十六觀図の図様を受け継いだものとして、知恩院藏の「紅紙金字十六觀經」が存在する。<sup>(17)</sup> 縦三七・二cm、横一二・四cmの一帖の折本装であり、高麗時代末から李朝時代の作例と考えられる。<sup>(18)</sup> 観経変の形式ではなく、経文の間に円形の区画を設けて図が描かれている。完本ではなく、「観経」の「仏白言、世尊、我宿何罪、生此惡子。」から第十觀の経文までを書写した部分が残つており、日想(挿図5)から觀音想までの題を付した図が各觀の経文の冒頭に配置される。各觀の図は「観経十六觀變相図」とよく似ているが、大きく異なる点として、僧形の觀想者が各觀に加えられていることが挙げられる。それに伴い、第一觀や第六觀は、觀想の対象が図の中心から觀想者と向かい合うよう配が変更されている。当麻曼荼羅の周縁部の十六觀図や敦煌の觀経変の十六觀図など(以下、十六觀図等という)には、觀想对



挿図5 知恩院藏「十六觀經」日想

象に向かつて座す韋提希が描かれており、こうした系統の影響によるものと推測される。観想者が韋提希から僧侶に置き換えられるということは、十六觀想が僧侶の実践行として行われるべきことを示したものと考えられよう。図様は元照系統の十六觀図の影響を受けていることは明らかであるが、各觀の名称は『觀經新疏』とは異なっている。特に第九觀を「偏觀想」としている点は他の諸本と異なる。本作例が元照の淨土教思想を説くために作られたものであるか、図様を借りただけのものかについては検討をする。

現存の作例から考へると、元照系統の觀經變や十六觀図の図様は中国、日本、朝鮮半島に流布し、特に朝鮮半島には様々な様式が生じるほど浸透していたようである。元照の『觀經新疏』が朝鮮半島にもたらされた時期ははつきりしないが、高麗の義天（一〇五五）（一一〇一）は元照より律・淨土の教えを受けており、帰國した後も元照と交流を続け、元照が開版した慈愍三藏慧日（六八〇～七四八）の『淨土慈悲集』の上巻を入手し、高麗において開版している。<sup>22)</sup>義天の編纂した『新編諸宗教藏總錄』に『觀經新疏』の書名はみられないが、他の元照の淨土教関係の著作の一部は収められている。<sup>23)</sup>このことから、元照の淨土教思想が受け入れられる土壤は整つており、比較的早い段階で『觀經新疏』は朝鮮半島にもたらされたと考えてよいであろう。

『觀經新疏』については、便宜のため『大正新脩大藏經』（以下、「大正藏」という）卷三七所収本を用いることとする。ただし、寛文十二年（一六七二）刊本を底本とし、天和四年（一六八四）刊本を対校本とする『大正藏』所収本は善本ではないという殿内恒氏の研究<sup>24)</sup>もある。そのため、明暦四年（一六五八）刊本と金沢文庫蔵の南宋

<sup>24)</sup> 本との対照をした殿内氏の四本対照翻刻によつて、適宜それらの諸本も参照しておきたい。

### 三、序分と流通分について

まずは画面中央上部の左右二つの図から考へてみたい。向かつて右の「王宮□韋提希□□」の図は王宮の中で蓮台に座す釈迦、その左右に二人の比丘、対面して座す韋提希が描かれている。難読箇所は「王宮□韋提希說法」という王宮における韋提希に対する説法の場面についての題記と推測される。<sup>25)</sup>『觀經』に「目連侍左、阿難在右」と説かれていることから、向かつて右が目連、左が阿難である。向かつて左の「耆闍崛山大衆雲集」の図は耆闍崛山の蓮台に座す釈迦と周りを取り巻く聖衆、そして対面して座る阿難が描かれる。

西福寺本には、同様の図はないが、第一觀と第十四觀の間に仏説法圖が描かれている。この図の解釈については二説が提示されている。一つは、第一觀の両側にある題記にうち、向かつて左の「安樂世界佛會圖」の題記が、本図を示していると解釈し、図中に『觀經』に登場しない聖衆の名前があることから、『無量壽經』に基づく阿彌陀淨土圖とする洪潤植氏の説<sup>26)</sup>、もう一つは、題記が西福寺本全体を示したものであると解釈し、十大弟子や十六羅漢及び過去七仏の存在から、釈迦が韋提希に十六觀を説く場面とする井手誠之輔氏の説<sup>27)</sup>である。「安樂世界佛會圖」に付隨する「觀彼世界相勝過三界道 正覺阿彌陀 法王善住持」の偈文は『無量壽經優婆提舍願生偈』からの引用であり、特に最初の二句は觀察門について説く偈文の始まりである。井手説のように、十六觀想を描く本図全体を示す題記

にふさわしいように思われる。ただし、本図を韋提希に十六觀を説く場面とする井出説にも問題がある。「観經」によれば、釈迦が韋提希への説法を行つた場は王宮で、その場に同席していると説かれるのは阿難、目連、侍女、諸天であり、本図の人物とは一致しない。西福寺本は「観經十六觀變相図」と比較すると、「四疑凡夫边地処」との題記がある図に代表されるように、「無量壽經」重視の傾向と無縁ではなが付加されていることが見て取れる。これは恵谷隆戒氏が指摘した新羅以来の朝鮮半島における「無量壽經」に基づく描写であろう。<sup>(31)</sup> すなわち、この説法図は「無量壽經」と「觀無量壽經」に基づく耆闍崛山における釈迦の説法図であり、さらには本図に對面する人間への説法であるとも考えられる。

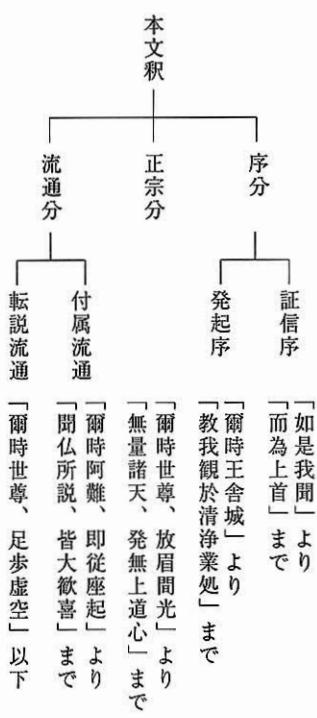
「大智律師禪觀図」では、蓮華座に座す釈迦とその左右に阿難と目連、さらにその周りを取り巻く菩薩と天部（四天王か）が描かれている。韋提希は対面に合掌して座す。王宮と取れる描写はなく、背後には湧雲が描かれる。囲繞衆は「王宮<sup>〔韋提希〕</sup>觀図」と「耆闍崛山大衆雲集」を併せたような図となつており、下部の偈頌に「靈山衆会」、「韋提請法」とあることからも両図を併せて描いたものと考へてよいであろう。

「観經十六觀變相図」の一図の解釈については、これまでのところ二説が提示されている。一つは、両図とも「四帖疏」でいうところの序分義にあたるとする解釈である。もう一つは、「観經新疏」の科文に基づき、王宮の図を序分、耆闍崛山の図を流通分とする解釈である。<sup>(32)</sup> 先の説には、向かって右から左に展開する「観經十六觀變相図」の構成と、「観經」の序分が耆闍崛山から王宮へと場面が移動するという時系列を照らし合わせた場合、耆闍崛山を右、王宮

を左に配置するべきではないかという問題がある。次の説についていは、耆闍崛山が流通分のみを示すとすれば、「耆闍崛山大衆雲集」という漠然とした題記よりも、たとえば「耆闍崛山阿難重説」のような流通分に限定した題記の方がより適切なのではないだろうか。この点について改めて検討しておきたい。

まずは「観經新疏」に提示された「観經」の科文より考えてみる。本文に関する科文は次のようである。<sup>(33)</sup>

### 『観經新疏』科文



このように經典を序分、正宗分、流通分の三つに分ける方法は、經典解釈において最も一般的な分類である。既に山川論文の指摘に<sup>(34)</sup>もあるように、先にあげた三つの注釈の中で「慧遠疏」と「天台觀經疏」がこの三つの分類を採用するのに対し、「四帖疏」は序分、正宗分、得益分、流通分の四つに分けている。

さらに「観經新疏」は序分を証信序と発起序の二つに分ける。証信序は耆闍崛山に釈迦と聖衆が集まつてゐる様子が説かれる。発起序は未生怨説話の部分で、阿闍世が父の頻婆娑羅に続き、母の韋提希も王宮に幽閉する。そのことを嘆き悲しんだ韋提希の要請により、

釈迦が目連、阿難と共に韋提希の前に現れ、韋提希が釈迦に浄土に往生するための方法を問うまでが説かれる。『天台觀經疏』の經典の区切り方もこれと同様である。『慧遠疏』も序分を二つに分けるが、「如是我聞」を証信序とし、「一時仏在」以降を証信序と發起序の内容を兼ねたものとしている点で『觀經新疏』とは異なる。

流通分も二つに分けられ、『觀經新疏』は付属流通と転説流通、『慧遠疏』は王宮流通と耆闍流通、『天台觀經疏』は王宮流通と鷲山流通と名付けている。名称は異なっているが經典を区切る箇所は全て一致する。付属流通とは、王宮において釈迦が阿難の問い合わせに答えて經典の名を明らかにし、阿難に付属するまでが説かれる。転説流通とは、王宮から耆闍崛山へと還り、釈迦が王宮にて説いたことを阿難が耆闍崛山の聖衆のために再説するという内容である。すなわち、『觀經新疏』と『天台觀經疏』は耆闍崛山と王宮という場所の違いにより、序分と流通分をさらに二つに分けているということになる。以上のことを『觀經新疏』の内容と照らし合わせると、二図の解釈にはもう一つの可能性が考えられる。すなわち、王宮の図が發起序と付属流通、耆闍崛山の図が証信序と転説流通の内容を兼ねるという解釈である。題記も序分と流通分のどちらにも通じる内容である。この解釈について、他の文献からも検討してみる。先に述べた『樂邦文類』所収「十六觀頌」の最初の十句は以下のようである。

靈山衆会 耆闍崛山没、王宮中出。事畢還帰、阿難重説。  
韋提請法 禁閉深宮、發起大事。濁惡衆生、于今受<sup>(38)</sup>賜。

この十句で『觀經』の序分と流通分の内容を簡潔に示していると考えられ、この後に十六觀についてそれぞれ五句の偈頌で説いてい。『靈山衆会』以下の五句は釈迦が靈鷲山（耆闍崛山）から王宮へ出現し、阿難が戻って王宮での教えを説いた出来事についてまとめたものである。『韋提請法』以下の五句は王宮での韋提希の要請によって、後世の五濁惡世の衆生に『觀經』の教えが残されたということをまとめたものである。偈頌の最初の一旬はそれぞれの題記とよく似ており、序分と流通分の内容を場所によつて分けているという先の解釈とも一致する。

「十六觀頌」と『觀經十六觀變相圖』の関係は明らかではない。しかし、『大智律師禪觀圖』では『大智律師元照頌』が各図に配当されており、二図を併せた最初の図に、この十句が配当されている。また、西福寺本には題記の後に、知恩院本や隣松寺本には図の下部に、別の十六觀頌が付け加えられている。さらに、元照は『樂邦文類』卷二所収の『觀經九品圖後序<sup>(39)</sup>』の中で、姑蘇の逸上人が九品圖を作り、経文を引いて解説し、偈頌を用いて激励したことを記している。こうしたことから、觀經變や十六觀圖が十六觀頌とともに用いられた例があつたことは間違いない。『觀經十六觀變相圖』も似たような十六觀の偈頌とともに用いられた可能性は十分に考えられる。

さらに、「觀經十六觀變相圖」の構成からも検討してみたい。本図に配置される十六觀は画面上部の第一觀より始まり、向かって右の区画を上から下に、向かって左の区画を上から下に、そして画面中央を下から上に向かっていく。この構成について大西磨希子氏は「観者の視線が循環する配置<sup>(40)</sup>」としている。そうであるならば、循

環の始点であり終点でもある画面上部に配置される両図が經典の最初と最後にあたる序分と流通分を兼ねると考えても矛盾はない。

ただし、この解釈では両図の配置と時系列が異なる問題は残つてゐる。これについては、序分の主題は發起序よりも証信序にあると考えられる。そうであるならば、王宮の図を耆闘嶋山の図より先に配置することについても違和感はないであろう。

#### 四、第一日觀について

次に正宗分の図の検討に入る。正宗分は釈迦が韋提希の要請に応えて諸仏国土を示現し、韋提希がその中より極樂淨土を選択したことにより、釈迦が往生のための十六觀を説法するという内容である。「觀經十六觀變相図」は正宗分を中心に構成されている。

正宗分の検討に入る前に元照の「觀經」理解について確認しておきたい。既に指摘があるように、元照の立場を端的に示しているのは以下の文である。

天台云、此經以心觀為宗。此則單就能觀為言也。觀仏依正、得非心觀乎。遠師善導並云、諸經所弁宗趣各異。此經以觀仏三昧為宗。此則通就能所而立也。觀雖十六、依正不同、而主在觀仏。即下經云、於見身中得念仏三昧、念即是觀。<sup>(4)</sup>

すなわち「觀經」の經宗は「天台觀經疏」の説く「心觀為宗」ではなく、慧遠や善導と同じく「觀仏為宗」としている。そして、「觀經」には極樂淨土の依報と正報である十六觀が説かれるが、主は正

報である觀仏にあることを述べている。また、第八觀や第九觀に説かれる念佛三昧の「念」とは「觀」、すなわち觀仏三昧であること明らかにしていることも重要である。

それでは具体的な内容の検討に入つていきたい。まずは「第一日觀標□想□」との題記がある第一日觀について考えてみる。第一觀は西に沈む夕陽を觀想するものである。「觀經十六觀變相図」では、中央上部の序分と流通分の図の間に区画を設けず、太陽を大きく描き、下から太陽に向かつて雲が湧き上がる。王宮の図との間には、雲に乗る韋提希と二人の侍女が描かれている。題記については濱田氏が「第一日觀標示想處<sup>(42)</sup>」と推測し、以後も概ねこの見解を踏襲、あるいは不明としている。これは『觀經新疏』において『觀經』の「仏告韋提希、汝及衆生、應當專心繫念一處、想於西方。」という経文を「標示繫想處」と分類し、注釈していることによると考えられる。しかし、両本の調査の結果、この箇所は「處」とは判読できなかつた。「處」の異体字である「霽」、あるいは「方」の可能性が考えられるが、現状では不明である。<sup>(43)</sup>

「大智律師禪觀図」は太陽とその下に湧雲を描いており、図様はほぼ同じである。西福寺本は題記が異なり、「第一表日没之觀」となつてゐる。仏説法図と一体化しており、湧雲はなく、太陽の中には樓閣が描かれている。大高寺本は全容をうかがうことは難しいが、朱が残つており、同じように太陽が描かれていたと考えられる。隣松寺本は太陽の中に鳥と樓閣を描き、他の高麗や李朝の諸本では太陽の中に三本足の鳥を描いてゐる。

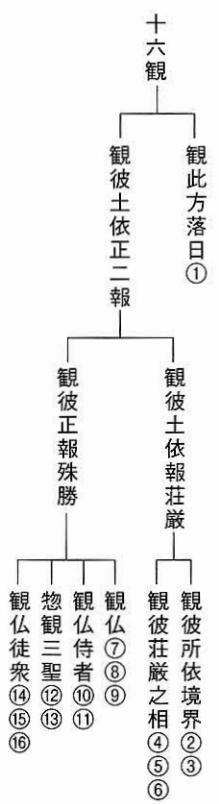
十六觀図等の作例では、遠くの山や海に沈む夕陽が描かれる例が多い。太陽の中に三本足の鳥を描く例もよく見られる。ただ、「觀

「経十六観変相図」のように太陽のみを強調し、大きく描く例はあまりなく、これは元照系統の日觀の特徴の一つと言える。さて、大西論文でも指摘されているが、元照は第一觀を十六觀の中では独特の位置づけの觀想としている。そのことは『観經新疏』で以下のように説かれていることからも分かる。

就十六觀大分為二。初一種先觀此方落日指定向方。後十五種正觀彼土依正二報。初觀是總該下十五、下皆為別、各不相收。<sup>46)</sup>

この後には残りの十五觀に関する分類も説かれており、図示すると次のようなる。

十六觀分類（数字は第一觀～第十六觀を表す）



十六觀は大きく初觀と後の十五觀の二つに分けられ、第一觀は此土の日没を觀想するのに対し、他の十五觀は彼土の極樂淨土と仏・菩薩の觀想へと入っていく点で異なる。また、第一觀で西方へと向けた意識は他觀でも維持する必要があることから、「觀經十六觀變相図」でも他の觀とは異なることを明確に示したものと考えられる。「觀經十六觀變相図」の第一觀の横には韋提希（挿図6）が描かれているが、この点についてはこれまで充分な検討がされていないよ

うである。十六觀図等に描かれている韋提希の例はいくつも見出せるが、觀想対象に向かつて座す觀想者として描かれている。座す姿は『觀經』に「當起想念正坐西向」と説かれていることによるものであり、元照もこの文について「起想即發觀也。正坐則身儀也。全趺半趺直身累手如坐禪<sup>48)</sup>法」と注釈し、より詳しく述定している。しかし、「觀經十六觀變相図」の韋提希は侍女とともに雲に乗り、立った姿で太陽の横を降下しているように描かれていることから、觀想者として描かれているとは考えにくい。ここで注目したいのは韋提希に光背が描かれている点である。『觀經』における韋提希の位置づけについては、釈迦が韋提希に告げた「汝是凡夫。」という言葉の解釈について問題となり、諸師の解釈がなされている。『慧遠疏』と『天台觀經疏』は韋提希を



挿図6 阿弥陀寺本部分

実は菩薩であると解釈するのに対し、「四帖疏」では言葉通りに凡夫と解釈する。元照は韋提希について「大權引実、故示同凡」<sup>(50)</sup>や「此即大悲權巧利物方見、韋提位非凡小。」と述べていることからも分かることおり、『慧遠疏』や『天台觀經疏』と同様に菩薩と解釈している。すなわち、この光背を持つ韋提希は未來の衆生を觀想へと導いていく存在として描かれていたものと考えられる。

## 五、第二水觀から第七座觀について

画面向かって右の区画は第二觀から第七觀が描かれ、この区画の題記は左記のようである。

- 第二水觀表瑠璃地
- 第三地觀衆境所依
- 第四樹觀想彼林蔭
- 第五池觀想彼流泉
- 第六總觀總想四境<sup>(51)</sup>
- 第七座觀想仏受用

国土を觀想する第二水觀と第三地觀について考えてみる。

『觀經』によれば、第二水觀とは清らかで澄んだ水が水へと変化し、水が透き通った瑠璃地へと変化することを観していく。そして、その瑠璃地の下には金幢があり、瑠璃地は黄金の縄や七宝で区画されており、上空には瑠璃地から放たれる光が台となり、台上に樓閣、さらにその周りに華幢、樂器があることを觀想することが説かれる。第三地觀は第二觀で觀想したものをつけはつきりと觀じ、さらに進んで三昧へと入る觀想となる。

『觀經新疏』では、十六觀中に水に関連する觀想として、第二觀と第五觀の二つがあることを指摘し、第二觀の「水想」は極樂の瑠璃地を觀想するために、水から瑠璃地へと觀想を進めるためのものであり、その本旨は觀地にあるとする。題記に「表瑠璃地」とあるのは、この解釈によるものである。これに対して、第五觀の「想水」は極樂淨土の池沼を觀想するものとして、その違いを述べている。第三觀については『觀經』に具体的な觀想が説かれないことから、第二觀についての經文を二つに分け、水から瑠璃地へと変化するまでを第二觀とし、それ以降の瑠璃地とその莊嚴は、第三觀と解釈している。

「觀經十六觀變相圖」の第二觀では、阿彌陀寺本は上部にまばらに雲があり、画面のほとんどを波立つ水面が占めている。長香寺本やその莊嚴、左の六つの区画に阿彌陀仏や菩薩を分けて描いており、構成としては統一が取れている。しかし、先に見たように『觀經新疏』は第七觀を正報に属するものとしており、『觀經新疏』の分類と「觀經十六觀變相圖」の構成は一致しない。この点については後に検討することとして、まずは「所依境界」、すなわち極樂淨土の四分の三ほどが波立つ水面である。大高寺本は半分ほどを波立つ

水面が覆い、上部には雲が描かれる。「紅紙金字十六觀經」も雲と波立つ水面が描かれるが、観想者の座す地面が加わっている。

十六觀図等の作例では、水觀は「水の流れ」、「氷」、「方形<sup>3</sup>に水・氷・瑠璃を描く」など様々に描かれており、この違いは水から瑠璃地へと変化していく観想であることに起因する。ただし、「觀經十六觀變相圖」と同じような図様は見られないようである。

「觀經十六觀變相圖」の第三觀は花の模様の方形の区画（花博）<sup>(54)</sup>が集まつて出来た宝地があり、宝地からは絡まりながら五色の光<sup>(55)</sup>が立ち上る。光の上には楼閣とその両脇の華幢があり、周囲を楽器が飛んでいる。しかし、「觀經」に瑠璃地を支える金剛七宝の八角柱とあり、「觀經新疏」にはその形状が塔のようであると説かれている幢については、具体的に説かれていても閑わらず描かれていない。その点を除けば、「觀經」と「觀經新疏」の解釈に忠実な図と言える。「大智律師禪觀図」もほぼ同じであるが、空中の楼閣の数は少ない。西福寺本もかなり簡略化されているが、同じような図様である。大高寺本は花博とそこから放たれる光は確認できるが、空中の様子は不明である。「紅紙金字十六觀經」は、宝地が六角形の区画の集まりで表現され、六角形の中には花以外の模様も描かれ、経典から離れた表現となっている。

十六觀図等の作例では方形の区画が集まつた地面が描かれているものが多い。宝地を支える金幢の描写の有無は様々である。当麻曼荼羅の地想觀も宝地から放たれる光に樓閣を描いている。

「觀經」には第三觀の成就によつて滅罪と淨土往生が決定するところが説かれており、「觀經新疏」にはその例として唐の大行の伝記を挙げている<sup>(56)</sup>。また、漸想の境地である「粗見極樂國地」という状

態を「思惟」とし、三昧の境地である「見彼國地了了分妙不可具說」という状態を「正受」と解釈している点も注目される。元照は三昧を成就するに至つて心念を極樂淨土に送ることができ、往生が決定すると解釈したと考えられる。また、元照は十六觀の分類について述べる中で、「地觀為總、攝余三故。樹等為別、皆依地故。」として、宝地である第三地觀と、宝地の上にある第四樹觀から第六觀までの三觀を総別の関係で捉えている。

次に淨土の莊嚴の觀想である第四樹觀、第五池觀、第六總觀について考えてみる。第四樹觀とは題記によれば「林蔭」、淨土の宝樹を觀想するものである。「觀經十六觀變相圖」では、一本の宝樹が描かれており、宝珠のついた天蓋から垂れ下がる六重の網に覆われ、花や実を付け、枝葉は七層に分かれ、各層に垂飾がある。これは「觀經新疏」に「妙真珠網弥覆樹上、一一樹上有七重網。每樹七層、每層一重、其形如塔。」とある解釈を反映したものと考えられる。ただし、経文に「一一網間有五百億妙華宮殿」とある宮殿などは描かれていない。また、七重の網とあるが、長香寺本も阿弥陀寺本も六重の網となつてている。おそらく元になつた原本の誤りをそのまま写したことによるものであろう。宝樹から発せられる光の間には、幢幡や宝蓋が空中を舞つてゐる。宝樹の立つ宝地は、花博のない一段下がつた地面である。「大智律師禪觀図」は、構図は類似するが、宝樹は明確な七層ではなく、宝樹を覆う網や空中の幢幡や宝蓋もないなど表現が異なる。西福寺本は「觀經十六觀變相圖」を簡略化した図であるが、樹木全体を覆う白い網の他に、枝葉の層の間を赤い網のようなもので覆つてゐる。大高寺本では、宝樹は花博の上に立つてゐる。「紅紙金字十六觀經」は樹木を覆う網はないが、層の間

に宮殿が描かれている。また、地面には花博の表現はない。

十六觀図等にも様々な図様があるが、「七重行樹」という経文から複数の樹木を描くものが多く、「觀經十六觀變相図」のように一本の宝樹のみを強調したものはないようである。『觀經』には「七重行樹」、「七重網」などの経文はあるが、宝樹自体が七重（あるいは七層）になつていて、その間に宮殿を描いたものが見出される。このような淨土図の作例が元照の念頭にあつたと考えられる。

第五池觀とは「流泉」、極樂淨土の池や泉を觀想するものである。「觀經十六觀變相図」では、蓮池の中心の蓮台に乗つた如意珠より水が湧き、光が放たれている。これは元照が「每一池心、各有珠玉。

泉依玉出、流落池中、常時盈満。」と解釈することによる。また、光の間には様々な鳥が飛ぶ様子が描かれる。鳥の配置には違いがあるが、『觀經』や『阿弥陀經』の経文に出てくる極樂淨土にいるとされる鳥である。<sup>(62)</sup>「大智律師禪觀図」、西福寺本、大高寺本、「紅紙金字十六觀經」（挿図7）もほぼ同じ図様であるが、大高寺本には鳥が描かれていない。李朝時代の知恩院B本（挿図8）では、「從如意珠王生、分為十四支。<sup>(63)</sup>」という経文を受け、如意珠より湧く水は左右に七ずつの十四の流れに分かれて淨土図の中を流れている。元照はこれについて「十四支即是渠道<sup>(64)</sup>」と注釈しており、この水路を表現したものと考えられる。

十六觀図等の作例は、琉璃地で区切られた池の中に蓮や樹木を描く図が多く見られ

挿図7 知恩院藏「十六觀經」池想



挿図8 知恩院B本部分

る。「観経十六觀變相図」のように一つの区画で表すものや、「極樂國土有八池水<sup>(65)</sup>」「是為八功德水<sup>(66)</sup>」という記述を受けて四つから九つの区画に分けて描いたものもある。如意珠については、描かれていないもの、池の周りにいくつか描くもの、池の中心に大きく描くものなどがある。<sup>(67)</sup> ただし、如意珠を中心にして描く例は主流ではなかつたようであり、池の中心とする元照の解釈がどこから導かれたものかはつきりしない。池の中心で台の上に載り、水を出す如意珠の表現は、他の十六觀図等には見ることのできない特徴的なものであり、元照系統の第五觀の図であることを判定する際の一つの基準といえる。

第六總觀とは「四境」、すなわち宝樓、宝樹、宝池、宝地の四つの対象を総じて觀想するものである。「観経」の第六觀の前半では宝樓について説かれていることから、宝樓觀と呼ばれることがある。

「観経十六觀變相図」では、宝地に建つ宝樓を中心に据えて、両側に宝樹、手前に宝池が描かれている。宝樓は二階建て、中に蓮華座が置かれている。阿弥陀寺本には空中を舞う楽器も描かれている。

『觀經』と『觀經新疏』には、楽器についての描写はあるが、宝樓の中には天の樂人についての言及があるので、蓮華座に関する描写はない。「大智律師禪觀図」は、阿弥陀仏が中に座す宝樓を大きく描き、空中に樂器が舞う。「大智律師元照頌」には「宝樹地池、一念円成<sup>(68)</sup>」とあるが、宝樹は見えず、宝地とわずかに宝池を描く。總觀というよりは宝樓觀といった方が適當な図である。西福寺本は「観経十六觀變相図」を踏襲しているものの、宝池や楽器もなく、前に突き出た樓閣と後ろの樓閣の接続がずれており、写し崩れが見られる。「紅紙金字十六觀經」は、宝池の如意珠も含めた四境を配

置し、宝樓中には何も描いていない。空中には樂器や幡が舞う。こちらは總觀ということを意識した描写であることが伺われる。

十六觀図等の作例では、宝樓と宝樹をともに描くもの、宝樓のみ描かれているものなどがあるが、宝樓の中の様子まで描かれている例は少ない。ただし、当麻曼荼羅の宝樓觀には蓮華座と両脇侍が描かれている。また、淨土図に描かれる宝樓には、中に蓮華座を描く例も見られる。「観経十六觀變相図」の図様はこうした作例の影響を受けたものであろう。

先に地觀と後に続く三觀が總別の關係にあることを述べたが、地觀と總觀との關係はどのように考えたらよいのであろうか。ここで注目したいのは「此想成已、名為粗見極樂世界寶樹寶地寶池。是名總觀想、名第六觀。若見此者、除無量億劫極重惡業。命終之後必生彼國。」を解釈する以下の箇所である。

承前樓觀兼牒前三即為總觀。若別若總各逗機緣。此觀依報收無不尽。言粗見者即思惟也。下文若見此者即正受也<sup>(69)</sup>。

先の地觀でも見たように、ここでも元照は觀想を漸想（思惟）と三昧（正受）に分けて考えている。おそらく、漸想（思惟）の段階では地觀と總觀は別であるが、三昧（正受）の境地に至れば、地觀と總觀は最終的に一致すると考えていたのではないだろうか。

さて、第六觀と次の第七觀の間には一つの出来事が起ころ。釈迦は阿難と韋提希に苦惱を除く法を分別し解説することを宣言し、これを憶持し、大衆のために分別し解説することを求める。釈迦が語り終わると阿弥陀仏と觀音・勢至二菩薩が空中に住立し、韋提希は

阿弥陀仏に接足作礼する。そして、韋提希は自身が仏力によつてこの仏・菩薩を觀ることが出来たことから、釈迦がいない未来の衆生のために觀仏・菩薩の方法を説くことを釈迦に要請する。『觀經新疏』はこの箇所について以下のように解釈している。

前文光台現土、令韋提見以為依報發請之端、故云以仏力故見彼國等。今三聖共臨以為正報發請之由、故云因仏力故得見仏等。仏立空中二聖侍立。三聖立像斯為明拠。<sup>(25)</sup>

すなわち、先に仏国土を現したのは韋提希が依報の觀想を請う発

端とするためであり、阿弥陀仏と二菩薩が現れたのは正報の觀想を請うためとしている。この後に續いて第七觀の文が始まるところからも元照が第七觀を正報に属すものと考えていたことが分かる。また、『觀經』のこの箇所が阿弥陀三尊立像の典拠と指摘されている点も注目される。『樂邦文類』卷三所収の『開元寺三聖立像記』<sup>(26)</sup>でも同じように述べられており、宋代に阿弥陀三尊立像と坐像の関係が問題となり、元照はわざわざこのように注釈したと考えられる。<sup>(27)</sup>

第七座觀とは「仏受用」である蓮華座の觀想である。元照はこの觀想が器物を觀想の対象とするにも関わらず、正報とする理由について「欲瞻尊境、先觀坐處。如對君上、目視階陞。」と述べ、君子に對面するときに直接見ることはせず、下の階段を見る例を挙げ、仏の觀想もまずはその座から觀想するとしている。

『觀經十六觀變相圖』の第七觀は、宝地上に六角形の台座の蓮華座があり、蓮華座の上で四本の宝幢が瓔珞で出来た天蓋を支え、蓮華座からは光が放たれる。これらは『觀經』や『觀經新疏』の記述

に忠実な描写である。蓮華座から放たれた光の間には花が描かれており、これは光が金剛台、真珠網、雜華雲など様々なものに變現すると説くことによると考えられる。『觀經』には光が花に変じると述べられているわけではないが、淨土に花が降るという表現は様々な經典に見られるものである。<sup>(28)</sup>『大智律師禪觀圖』も同様の六角形の台座の蓮華座であるが、四本の宝幢や空中の花はなく、天蓋は二重構造などの違いがある。大高寺本も宝幢や花はなく、天蓋は一重構造である。西福寺本は、宝幢はあるが、花はなく、天蓋は一重構造である。『紅紙金字十六觀經』は西福寺本と似ているが、放光が描かれず、それまでの依報の図とは趣が異なる。

十六觀圖等の作例では、蓮華座のみを宝地や宝池に描くもの、蓮華座に坐像あるいは立像の阿弥陀仏と觀音・勢至二菩薩を描くもの、蓮華座に立像の阿弥陀仏のみを描くもの、それらをいくつか組み合わせたものなどが見られる。これは第七觀を阿弥陀三尊が空中に住立した箇所を中心にするか、蓮華座を中心にするかの解釈の違いであろう。当麻曼荼羅では宝地上に天蓋と四つの宝幢を持つ台座が六角形の蓮華座が描かれており、「觀經十六觀變相圖」の図様との類似点は多い。

先に述べたように、第七觀を右の区画に描くことは構図としては整理されているが、第六觀までを依報、第七觀以後を正報とする元照の分類とは異なる。經典を絵画化する際に、図像や構図の問題から經典通りに描かれないことは当然考えられる。しかし、元照が「觀佛為宗」という立場を取ること、第七觀を成就したときに五万億劫の罪を滅除するという經文を解釈して「此是觀佛最初方便、滅罪猶少。」と述べていること、以上のことからも第七觀を第八觀以降の

観仏に至る重要な前方便、すなわち漸想（思惟）と捉えていることが分かる。だからこそ、第八觀以降との連續性は重要と考えられる。

また、先に第六觀の宝樓中に蓮華座が描かれている点を指摘したが、これも蓮華座を依報と解釈した表現に近い。

また、題記に注目すると、『觀經』や『觀經新疏』には蓮華座の説明として、仏の「受用」と説く箇所はない。<sup>(27)</sup> この第七觀に「受用」の語を使用するのは『四帖疏』玄義分の以下の箇所である。

又言依報者、從日觀下至華座觀已來總明依報。就此依報中即有通有別。言別者、華座一觀是其別依、唯屬彌陀佛也。余上六觀是其通依。即屬法界之凡聖、但使得生者共同受用故言通也。<sup>(28)</sup>

善導は依報を通と別の二つに分け、第一觀から第六觀を凡聖に通じる「共同受用」の依報、第七觀を阿彌陀佛のみに属する別の依報としている。<sup>(29)</sup> 善導の第七觀までを依報とする分類は、本図の構図とも一致する。<sup>(30)</sup>

このように見てくると、第七觀の「觀經十六觀變相圖」における配置や題記は、元照の解釈を忠実に反映したものとは言い難く、むしろ、善導系統の觀經變や十六觀圖の影響を受けて作られた可能性が考えられる。

## 六、おわりに

本稿では「觀經十六觀變相圖」の前半にあたる第七觀までを中心

てきた。

まず、これまで指摘されている元照系統の觀經變及び十六觀圖の圖様を受け継ぐ作例についてまとめ、新たに知恩院の「紅紙金字十六觀經」を加えることができた。また、これらの作例を比較し、元照系統の圖様を受け継いだものと判断する材料として、觀經變の構成の特徴としては第一日觀を中央上部に大きく描く点を挙げ、個々の十六觀圖の中では、第五觀に描かれる池の中心で水を湧出する如意珠の描写を挙げた。

「觀經十六觀變相圖」の各図については、『觀經新疏』と照らし合わせることで、細かな点で相違は見られるものの、ほぼ忠実に描かれていることが分かった。十六觀以外の「王宮圖章提希說法」と「耆闍崛山大衆雲集」の題記を持つ図について、『觀經新疏』の科文、元照の「十六觀頌」、『觀經十六觀變相圖』の構成から、両図が序分と流通分の内容を兼ね備えたものとして描かれた可能性について言及した。

「觀經十六觀變相圖」の制作に当たっては、それまでの觀經變や十六觀圖の作例を参考にして作られていることは間違いない。しかし、元照の解釈を取り込み新たに描かれたと考えられる圖様もあつた。その一例として、第一觀の横に描かれている韋提希の存在について、他の十六觀圖等に描かれるものと異なり觀想者の姿でないことを指摘し、韋提希を菩薩であるとする元照の解釈から、人々を觀想へ導く存在として描かれていることを指摘した。

反対に元照の解釈とのずれが生じている構成や圖様が存在することも確認できた。第七觀の配置や題記に注目し、そのずれは善導の解釈に近いことを確認した。つまり、制作にあたっては、善導系統

の観経変や十六觀図を参考にされた可能性が高いと言える。そして、このことは個々の図の成立は別にしても、今回取り上げた「観経十六觀變相図」の原本の構成が元照の直接の指導の下で出来上がったと考えることは難しいことを示しているように思われる。前十三觀を均一に扱う大高寺本のような構成が残されている点からも、原本の成立年代については慎重に考えていく必要があろう。

今回は紙幅の都合上、「観経十六觀變相図」の前半、第七觀までを取り上げた。後半の検討については別稿に譲ることとした。

#### 〔註〕

- 1 阿弥陀寺本の上部には「観無量寿仏經十六觀相」との題記がある。本論で「観経十六觀變相図」という場合は、阿弥陀寺本と長香寺本の図様及び構成を指すこととする。
- 2 濱田隆「南都阿弥陀寺藏『観経十六觀相図』について」（『大和文化研究』四一四、一九五七年）  
管見の範囲では、下記の論文や作品解説が挙げられる。
- ①高崎富士彦「新重要文化財 観経十六觀變相図」（『MUSEUM』一〇〇、一九五九年）  
②山本興二「淨土教絵画」図版解説（京都国立博物館、一九七三年）  
③眞保亨「極樂絵」図版解説（毎日新聞社、一九七七年）  
④重要文化財編纂委員会編『解説版新指定重要文化財I 絵画I』図版解説（毎日新聞社、一九八〇年）  
⑤河原由雄「淨土曼荼羅—極樂淨土と来迎のロマン」図版解説（奈良国立博物館、一九八三年）  
⑥中野玄三「来迎図の美術」（同朋社、一九八五年）  
⑦河原由雄「日本の美術二七一 淨土圖」（至文堂、一九八九年）  
⑧河原由雄「淨土曼荼羅から迎撃図へ—高麗・李朝觀経變相図の展開」（文部科学省科学研究費補助金『日韓両国に所在する韓国仏教美術の共同調査研究』研究成果報告書）奈良国立博物館編、一九九三年）
- 3
- 4

⑨山川曉「十三～十五世紀における観無量寿経變相図の研究」（『鹿島美術研究年報』一三号別冊、一九九六年）

⑩山川曉「長香寺本観無量寿経十六觀變相図」について—宋代淨土

教絵画の受容と展開—」（『美術史』一四二、一九九七年）

⑪菊竹淳一・鄭于澤編『高麗時代の仏画』（時空社、二〇〇〇年）

⑫井出誠之輔『日本の美術四一八 日本の宋元仏画』（至文堂、二〇〇一年）

⑬井手誠之輔「高麗仏画の世界—東アジア美術における領分とその諸相—」（『国華』一三一三、二〇〇五年）

⑭大原嘉豊「観経十六觀變相図」（『国華』一三一三、二〇〇五年）及び図版参照

⑮中野玄三「智恩寺本十体阿弥陀像と観経十六觀變相図」（『続日本仏教美術史研究』、思文閣出版、二〇〇六年）

⑯北澤菜月「大勸進重源—東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出」図版解説（奈良国立博物館、二〇〇六年）

⑰大西磨希子「淨土寺阿弥陀三尊像の研究—元照の淨土思想の影響—」（『西方淨土變の研究』、中央公論美術出版、二〇〇七年）

⑯伊藤信二「未来への贈りもの—中国泰山石窟と淨土教美術」図版解説（九州国立博物館、二〇〇七年）

⑯北澤菜月「聖地寧波 日本仏教1300年の源流—すべてはここからやつて来た—」図版解説（奈良国立博物館、二〇〇九年）

⑯大原嘉豊「法然—その生涯と美術」図版解説（京都国立博物館、二〇一一年）

⑯瀬谷愛「法然と親鸞 ゆかりの名玉」図版解説（東京国立博物館、二〇一一年）

⑯福島光哉「宋代天台淨土教の研究」、文栄堂書店、一九九五年）

⑯佐藤成順「宋代仏教の研究—元照の淨土教—」（山喜房仏書林、二〇〇一年）

⑯吉水岳彦「靈芝元照の淨土教思想」（大正大学提出博士論文、二〇〇九年度）

⑯大正藏三七、二八五頁中下

前掲註4-③「第一章 元照の思想基盤と淨土教」



前掲註3-⑯では、第一日觀について「元照が觀想の全十六觀のなかでも特に初觀を重視し、その中に他の十五觀すべてを兼ねるほどの重要な意義を見出していた」としている。しかし、元照は「觀仏為宗」とするのであり、日觀を觀仏以上に重視していたとは言えないであろう。

【大正藏】三七、二九一頁中

【大正藏】一二、三四二頁上

【大正藏】三七、二九一頁下

【大正藏】一二、三四一頁下

【大正藏】三七、二九一頁上

【大正藏】三七、二九一頁中

55 前掲註3-⑦「付表（一）主要阿彌陀淨土變相圖對照表」参照。

【觀經】には地面に花の模様があることは説かれていないが、「觀經新疏」は地上の莊嚴として「初地華級：（中略）：金繩七寶互相間錯、如世花博。」（『大正藏』三七、二九二頁上）と述べている。前掲註19の指摘によれば「大正藏」本の「級」は「紋」の間違いである。すなわち、地面には花の模様があり、それが世の中の花博のようであるとしている。

55 先行論文では「五色の雲」（前掲註2）、「五条の靈氣」（前掲註3-⑩）と表現されるが、ここでは經典に基づき、「光」としておく。前掲註3-⑯「第一部 唐代の西方淨土變」でも光を雲のように描く例があることは言及されている。

また、阿彌陀寺本は五色に描き分けられていることがはつきりするが、長香寺本では確認が困難である。

56 前掲註4-③「第四章 往生に関する諸問題」では、戒珠『淨土往生伝』からの引用であることを指摘している。

57 『芝苑遺篇』所収の「上櫨菴法師論十六觀經所用觀法書」でも「初落日觀指其路頭、至第三地想成已、除疑破障、蓋心念已達彼方矣。」（『正統藏』五九、六四六頁上）と述べている。

前掲註4-③「第四章 往生に関する諸問題」では、地觀の成就によ

つて第六識の想念を未死の状態で極樂淨土へ送るとする。

【大正藏】三七、二九一頁下

【大正藏】三七、二九三頁上

【大正藏】三七、二九三頁下

【大正藏】三七、二九三頁下

【觀經新疏】で「即小本中白鵠孔雀、今經下文鳩鷺鴛鴦當等」と注釈するように、「觀經」では「鳩鷺、鴛鴦」（大正一二、三四三頁中）、「阿彌陀經」では「白鵠、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命之鳥。」（大正一二、三四七頁上）と説かれている。長香寺本に見られる人面双頭の鳥は共命鳥であろう。

【大正藏】一二、三四二頁中

【大正藏】四七、二九三頁下

【大正藏】一二、三四二頁中

【大正藏】一二、三四二頁下

【大正藏】一二、三四二頁下

【大正藏】一二、三四二頁下

【大正藏】一二、三四二頁下

【大正藏】一二、三四二頁下

【大正藏】一二、三四二頁下

【大正藏】一二、三四二頁下

【大正藏】三七、二九四頁中

【大正藏】三七、二九四頁中

【大正藏】四七、一八六頁中～一八七頁上

戒度は「靈芝觀經新疏正觀記」卷下でこの箇所について「世謂立像不尊。」（『淨土宗全書』五、四八九頁上）と注釈しており、南宋時代に立像を尊いものとしない考え方の一派が存在したことが分かる。

【大正藏】三七、二九四頁下。ちなみに善導は「四帖疏」玄義分の中で第一觀から第六觀を通依とし、第七觀を別依としており、依報と解釈している。

極樂淨土の一例としては「阿彌陀經」の「昼夜六時、天雨曼陀羅華」（大正一二、三四七頁上）が挙げられる。

【大正藏】三七、一九四頁下

77 76 南山律宗の開祖である道宣（五九六～六六七）の「四分律刪繁補欠」

事鈔』卷中之一（『大正藏』四〇、五七頁中）には三宝物のうち、仏物を四種に分け、その第一を「仏受用物」として「堂宇衣服床帳等」を挙げている。『四分律』によればこの中に「坐具」（『大正藏』二三一、八五六頁下）も含まれる。本書の注釈である元照の『四分律行事鈔資持記』にも「仏受用」の語は使用されていることから、そうした認識はあつたと考えられる。『観経新疏』で「仏受用」の語を用いながらたのは、善導の解釈との違いを明確にする意図があつたのではないだろうか。

『大正藏』三七、二四六頁下

79 良忠「観経疏伝通記」では、この箇所を解釈して「華座唯仏受用故云誰属弥陀。」（『大正藏』五七、五三〇頁中）と述べており、「仏受用」の語が使われている。

80 『慧遠疏』は第七觀までを依報に分類し、『天台疏』は第六觀までを依報に分類する。

〈附記〉

本稿は平成二十三年度科学研究費補助金 奨励研究「宋代浄土教美術に表現される元照の思想的影響の研究」の研究成果の一部である。

研究と写真利用にあたつてはご所蔵の各寺院より格別のご高配を賜つた。写真については京都国立博物館、奈良国立博物館よりご提供いただいた。また、京都国立博物館 赤尾栄慶氏、山川暁氏、大原嘉豊氏をはじめとする多く方々よりご協力、ご助言を賜つた。ここに記して感謝申し上げる。